

64 『赤水玄珠』の「方外還丹」について

猪飼祥夫

『四庫全書総目提要』によれば、『赤水玄珠』三十巻、明の孫一奎の撰。この書を評して「大旨は、専ら明証をもって主としている。だから、寒熱・虚実・表裏・氣血の八つのものに諄々として心を砕いている。それは、古今の病証と名称が相混乱しているところを弁別してもつとも明晰である」と述べている。しかし、第十巻の「怯損勞瘵門」に「方外還丹」があることによつて、大きな瑕としてゐる。その内容は「専ら人をもつて人を補う採煉の術を講述していることは、まことに正道ではない。しかし孫一奎は医術をもつて公卿の間を遊歴したので、このことをその嗜好にあわせるようにしたのはやむを得ないことであつた。ついに書物全体の大きいなる瑕になつた。これは惜しむに足ることである」という。すなわち、人をもつて人を補う採煉の術とは、女性の陰を用いて男

性の陽の氣を益す、房中の術にかかわる秘技である。清の陸以湑は『冷廬雜識』巻八で『赤水元珠』を評して「医理をはつきりさせ、後学を裨益している。ただ制鉛の法を記載するは、白圭の斑点である」と、その「制鉛の法」を汚点として非難している。

孫一奎、字は文垣、東宿、別号は生生子、安徽の休寧の人、明代の嘉靖から万曆の年間に活躍する。黄古潭を師として門下となる。有名な汪機の再伝の弟子である。また孫一奎は新安の医家の一人である。現在の安徽省から江西省にまたがる新安は、宋代より今に至るまで名医を輩出すること五百人あまりといわれている。

『赤水玄珠』の「方外還丹」以下の部分には非難が多い。その理由は、人て人を療する「採陰補陽」のための技法が述べられているためである。特に紅鉛を採取する方法は秘伝で、内丹を奉じる道教集団の中では口伝でしか伝えられなかつた。「三峯採戰の術」によれば、それは男女の性的結合によつて紅鉛を採取する房中の方法であるが、『赤水玄珠』の「取紅鉛法」には、また別の方法が述べられている。紅鉛を採取するには、それにいちばんふ

さわしい鼎(女性器の隠喩)を選ばなければならない。「凡そ女鼎を扱ふには、十悪を犯すものを忌み、すべからく五善のものを用い、百日調養し、五葷三厭辛熱等物を食べないようにし、彼女の生年月日が五千四百八十日に至るのを算える。」すなわち、女鼎は十四歳のいまだ初潮の来ていない女性が対象である。丹道の東派秘書の『玄微心印』にはその日数を五千四十八日とする。また『金丹節要』にも五千四十八日の未経の鼎を金鼎とする。二七の歳(十四歳)とするので、五千四十八日が妥当と思われる。紅鉛を採取するには、健康で性格のよい女性が必要とされる。その採取の方法は、『玄微心印』の「応星応潮」と「観炉口訣」にあるが、その具体的な方法を述べていない。しかし「取紅鉛法」では、具体的に女性の初潮血(金鉛)を採取して、真土(糞便で作ったもの)で包み薬剤とする。ここでは性的結合は関係ない。さらに「取梅子法」や「取碧玉僊桃法」などの薬物の採取とその製法が続く。これらの薬物は、人物薬と呼ばれるものに類する。その原理は同種療法に求めるべきものであるが、「葉貴全(同)類」の解説に「僊経に、全類は功を収め易いが、非

種であると巧くないという。ここで全類の薬を求め、これを処方に合わせて、補益の助けとする。これを得たものは、これを宝とすべきである」という。すなわち、同類の女性の経血を用いて、男性の陽を補う方法を述べているのである。

明の高謙の『遵生八箋』と洪基の『攝生総要』には、『赤水玄珠』の同類薬と同じものがあり、また先に述べた丹道の東派の文献には同様の技法が述べられている。ここには道教の明代の一派である東派と新安の医家たちの間に、房中の技法や同類薬に共通の認識があったと推測される。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部)